日本現代文學全集・講談社版 80

武田麟太郎 島木健作 集

編集

伊藤整
亀井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

日本現代文學全集

80

武田麟太郎・島木健作集

編集
伊藤整
亀井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和38年10月10日 印刷
昭和38年10月19日 發行

定價 500圓

© KŌDANSHA 1963

著者 武田麟太郎（たけだりんたろう）
島木健作（しまきけんさく）

發行者 野間省一

印刷者 北島織衞

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話東京（942）1111（大代表）
振替東京 3930

印刷 大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷 株式會社興陽社
製本 大製株式會社
製函 株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
背革 小林榮商事株式會社
表紙クロス 日本クロス工業株式會社
口繪用紙 日本加工製紙株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

武田麟太郎集　目次

卷頭寫眞
筆蹟

暴力……七
檻……二五
連絡する船……三〇
反逆の呂律……三三
日本三文オペラ……三八
釜ヶ崎……四九
市井事……六三
勘定……七三
一の酉……八八
現代詩……九八
井原西鶴……一〇五
大凶の籤……一二四
好きな場所……一三四
情婦……一四〇
雪の話……一四五
面影……一五〇
彌生さん……一五七

横光利一……一六九

川端康成小論……一七四
西鶴町人物雜感……一七九
好色の戒め……一八三
京都學校……一八五
ああ、俗悪なる――……一八六
作品解説……中村光夫　四一六
武田麟太郎入門……澁川驍　四二一
年譜……四二八
參考文獻……四四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

島木健作集　目次

巻頭寫眞
筆　蹟

癩……一九一
盲　目……二一四
生活の探求……二三三
赤　蛙……二三九
黒　猫……二四三
むかで……二四八
土　地……二五〇
文學的自敘傳……二九五
野呂榮太郎氏……四〇〇
中原中也氏……四〇三
病囚の處遇……四〇五
スポーツ私感……四一二
作品解說……中村光夫　四一六
島木健作入門……澁川驍　四二四
年　譜……四三六
參考文獻……四四五

武田麟太郎集

ひとで

44

武田麟太郎

とよ（十四）

たがい私のうちに潜んでゐる悪魔が放逸に琴線よりは[illegible]つたく

いやじ自覚さうた認識としては放恣ど

暴　力

1　白い手

家畜が列んでゐる。獸醫は一匹づつ叮嚀に檢査した。食用に差しつかへのないのには、ベタベタと紫の判を押した。――今、青年たちは、その家畜のやうに裸體で押し列んでゐた。彼らも檢査されるのだ。カーキ色で平腰の軍人が一人づつを叮嚀に調べあげた。そして、彼らの役に立つのには、合格の判をベタリと押した。

杉平治も二十一歳になつてゐた。强制的に彼も亦この檢査場に連れて來られた。

「何と云ふ身體だ――不忠者め」

軍醫はピンとはねた髭をしかめて呶鳴つた。そしてパチパチと薄い平治の胸を叩き、白い細い腕をねぢあげた。この身體は明かに用には立たない。平治は助かつた。

それから永い間、檢査場の板の間に起立したまま、青年たちは待たされた、午後一時になつて、將校が訓示をはじめた。

それはアメリカの軍備についてであつた。ロシアでは共產主義が不可能なので、資本主義制度に立ちかへつた、とその肩章をキラキラさせた男は云つた。日本でも一旦緩急がある場合にはバスはすべて陸軍の手に收められ、改正された軍用道路の上を驅けることができる、と彼は威張つた。「都市計畫にはそんな重要な意味がふくまれてゐるのを忘れてはいけない」――彼は明かに開戰について語つたのだ。

この演說の間に平治は背中に强い視線を受けてゐるのを感じた。ふりむく。すると、髮の長い、太い眼鏡をかけた、青年がゐた。彼は猛々しい脂の浮いた顏をしてゐた。ぢつと見つめるとその容貌の中から、中等の初年級の時、同じ組だつた三好の稚い顏が浮び出て來た。彼は大へん變化してゐる。

歸途、三好は平治を喫茶店につれて行つた。そして盛に煙草を吸ひ、激しい口調で、彼の最近について語り出した。それは東京に於ける彼や仲間の生活であつた。彼は支配者に對する反抗について云つた。一切の政治權力の惡について語つた。勞働者の暴力について云つた。

きいてゐるうちに、平治は飛びかかつて來る恐しい黑い機關車のやうなものを感じた。それらの新しい言葉は彼を壓倒した。そして永い間忘れてゐた激情の思ひ出が彼の胸に歸つて來た。幼年時代に彼が好いた傳奇小說の中に「魯國虛無黨員」といふ言葉を見出した。彼はこれにある異樣な心のときめきをおぼえた。又、ある日の新聞に、その頃高名な無政府主義者が情婦に刺された記事が載つた。

「社會主義者――氏」と書かれてあつた。彼には「社會主義者」の意味を理解することはできなかつた。だが、その文字は烈しく彼を魅惑した。――今、それらの記憶が歸つて來たのだ。

「うむ」と彼は云つた。

三好はつづけて、こちらで捕縛されてゐる彼の同志たちに差し入れをしなければならないと云つた。その同志たちは、將軍を屠殺しようとしたのだ。

「屠殺！」

平治は繁榮する大通りの裏にある自家に歸つて來た。家の中は暗かつた。そして坊主は晝寢をしてゐた。この坊主は死人の絕え間なかつた杉の家の、佛守りとして、寺からやつて來てゐたのだ。彼は

平治の嬰兒の時代にやつて來た。そして、何時の間にか家の總支配權を握つてゐた。彼は仲介者になつて總本山の方へ毎年多額の寄進をさせられた。そのために僅かの財産も次第に殘り少くなる。總本山の法主の豪奢な放蕩は新聞記事を賑してゐた。杉はこの法主を極端に憎んだ。だが杉の祖母は「極樂に行ける」と樂しんでゐた。その祖母は奥の間で年中蒲團の中にゐる。彼女の身體はもう動かなかつた。やがて彼女も死ぬにちがひない。すると杉の家では平治だけが殘るのだ。

平治は殺伐な顏をして、佛壇の列んでゐる部屋を通つて、奥の間に來た。老婆は彼が兵隊にとられなかつたことを聞き、「やれ、やれ」と悅んだ。

東京へ去つた三好からは、毎月彼らの定期刊行物を送つて來た。平治はその薄い雜誌の理論については考へるよりも感じることができた。

彼の今まで知らなかつた世界についての興味が起つた。彼は時々遠くの工場街へ出かけて行つた。彼はそこで「勞働者」に逢へるだらうと考へた。だが、何時も工場は大きな灰色の壁で包まれてゐた。彼の視線は内部までとどかなかつた。煙は太く地にまで下りて來て彼の鼻を痛めた。大工場の入口にある交番では若い巡査が、風呂歸りの近所のアイマイ屋の女と冗談を云つては、野卑に笑つてゐた。どこもここも殺風景だ。街角に小さな寫眞屋がある。彼は近づいてガラスの飾窓を覗きこんだ。五人の女給姿の寫眞があつた。そのうちの一人はエプロンの上に、三好が送つてくれる無政府主義の雜誌をのせてゐた。その横にある鐵工組合の爭議記念の大きな寫眞がある。だが、それらの勞働者の顏は、平治の想像の丁度反對であつた。彼は失望した。何と云ふ精氣のない！　何といふ鈍感さうな！

それから夏が來た。祖母は次第に衰弱した。彼は老人が死ぬことには少しの憐みも持つことはできなかつた。醜い彼らの姿が消えて了ふ方が、世界は少しでも美しく見えるだらう。――老婆は大袈裟に苦痛を訴へた。平治はそれをきいてゐると海へ行きたくなつた。

そして海へ來た。海は廣くて、光に滿ちてゐた。男女の皮膚も生生としてゐた。彼は泳げない。だが脫衣するために、葭簀張りの中にはいつた。そこで衣類を預つてくれるのだ。彼はキモノを取りながら、番人を見た。番人は少女であつた。少女は男のやうにタオルを首に捲き、ハモニカを吹いてゐた。頰と圓い肩とは栗色に燒けてゐる。眼はつりあがり、白眼がちだ。

彼は海に出て、冷い水の中で、その少女について考へた。それから濡れて光る身體のまま、砂にはらばつて葭簀の中を覗つた。少女はキモノ籠を整理しながら、彼を睥んだ。その大きな眼は極めて非女性的であつた。平治は「これは美しい」と思つた。

畑の眞中に高いコンクリートの塀が聳えめぐらされてゐた。その周圍は五町もあるだらう。その塀の中に監獄があつた。外界から遮斷された中では、腰に鎖をつけた囚人が働いてゐた。しかし表からは靜寂だけしか見られなかつた。

夜、月が昇り、その灰色の塀は一層巨大に、怪しく見えた。それに沿つて少女が走つた。平治が追ひかける。遊戯だ。少女は逃れて土手に來た。土手の下には川が流れて音を立ててゐた。上には長々と鐵橋がかかつてゐる。夏草の中に少女は倒れた。息切れをしながら平治が飛びこんで來た。突然、明るい窓を持つた列車が、鐵橋の上を音を立てて走つた。

その夜晩く、平治はしみこんだ草の香に、鼻をクンクン云はせて歸つて來た。すると老婆は死んでゐた。

坊主と平治とが暗い家に殘つた。二人は共に生活することはできないだらう。二人は毎日睨みあつた。だが、この暗い家も潰れる時が來た。都市計畫の地圖で、ここは大きな道路に指定されたのだ。――こんな家は早くつぶされた方がよい！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

立退きの代償として若干の貨幣が貰へることになつた。坊主はそれを區役所に受取りに行つた。そしてその金を持つたまま、遁走した。これは愉快な解決であつた。平治はのびのびとして、家財を賣り始めた。

少女は海水浴場が秋になつたので、自分の家に歸つて來た。彼女はそこでセツ子と呼ばれてゐた。家には義父と親戚の男とがゐた。どちらも大工だ。その親戚の男と彼女とは結婚することになつてゐたのだ。

「あんたは私がその七造さんと一緒になつても構はないの」と少女は云つた。

どうしていけないのか。平治はこれは普通の愛ではないと思つた。彼女を愛すると云ふのは、こんな風ではいけないのか。——彼には動物的な愛情は感じることができた。だが、それ以上のものはなかつた。

少女はタイピストになつたと云つた。彼は彼女がつとめてゐるビルディングに出かけて行つた。すると、彼女はエレヱエターの運轉をしてゐた。

「どちらも指を使ふ職業ですわ」と氣取つて東京語を使つた。そして、彼らは六階の間を往復して、しやべりつづけた。

冬から春が來た。たうとう古い家を立退く期限が來た。平治はこのまま東京へ行つて了はうと考へた。そして、セツ子には默つて出掛けることにした。彼女は大袈裟に自分を悲劇の主人公にして芝居じみて泣くだらう——そのことは堪へられなかつたから。

惡いことに、その朝、セツ子は笑ひながらやつて來た。彼は口も利かずに家を出た。道路になつて了ふこの生れた家を出た。停車場はこの都會の北の端にある。彼はそこまで歩いて行かうと考へた。そして歩いて行つた。すると、少女は口笛を吹きながら、彼の先になつたり、後になつたりしてついて來た。途中で、風は雨に變つた。最初の雨滴がセツ子の髪の毛の上に落ちた。さし延ばした平治の掌の上に、つづいて圖太く雨は降り出した。彼は少しく考へてゐたが、乘物にも乘らずに、どんどん歩いて行つた。少女も草履をペタペタ云はせて、ズブ濡れになつてついて來た。停車場へ來た。その中は人いきれでムツとしてゐた。短銃をさげた憲兵が人々を睨み廻す。平治は人々と荷物の間を通つて切符を買つた。

「あんた、どこへ行くの」

セツ子はキヨトンとして訊ねた。平治は切符を見せた。彼女はそれを見ると、赤くなつた。「あんた！」と云つて彼の顏を見た。それから悲しさうな顏に變つた。

彼は改札口の方へ行つた。セツ子は駈けて行き、切符を買つた。だが、彼女には見送りの入場券しか買へない。

歩廊の中まで雨は横に降りこんで來た。汽車は來た。彼は乘込む前に少女を見た。セツ子はぐつと口を食ひしばつて低い聲で云つた。

「あんたは、たうとう私を捨てたのね」

捨てる？　平治は何か云はうとした。だが、その前に手がポケットの中の貨幣のいくらかを摑んだ。とつさに、彼はそれを彼女に突き出した。

「傘でも買つて歸れ」

そして乘り込んだ。こんでゐた。歩廊の反對側に席を見つけた。前には朝鮮人がゐて、キヨロキヨロしてゐた。窓の外では、セツ子は銀貨を手にしたまま、ぼんやりしてゐた。やがて發車した。彼女の大きく見開かれた眼が去り、長い歩廊を出ると、車室はパツと明るくなつた。

2　東京の埃

首府は乾燥してゐた。そのために、トラックの車輪や、自動車の

警笛や、人間の叫び聲が少しの調和もなくぶつかりあひ、空に撥ねかへつて、人々にトゲトゲしい、焦立たしい心を起させた。空は灰色に塗りこめられ、土地には風が吹いて、砂塵が烈しく立つた。建築中の建物は裸の骨骼をさらし道には穴が掘られ、シャベルだけが見えて泥砂をくみ出した。——平治はその中に立つた。どこへ行かうか。目的はなかつた。

高いビルディングとビルディングとの間を、小さい彼が歩いた。埃が眼を痛めた。涙をハンカチで拭いた。そして眼を開くと王宮が彼の前にひかへてゐた。だが、それは近いやうに見えてなかなか遠いところにあるのだ。突然彼の前を憲兵がオートバイで走つた。眼を轉じると、一隊の兵士が城の周圍を行進してゐた。——平治はクルリと踵をかへした。ガードの下を通り、電車通りに沿つた。どこへ行けばよいか。

彼は雜誌店に飛びこんだ。三好の關係してゐた雜誌の發行所を調べて、そこへ彼を訪ねて行かうと思つたのだ。東京の中で唯一人の知人だ。多くの雜誌が彩色されて列んでゐた。そのうちに被支配階級の主張を公然と掲げてゐる雜誌は片隅にかためられてあつた。だが、そのうちに三好らの雜誌は發見できなかつた。

「あれは最近は出てゐません」

店員は無愛想に云つた。遂に古本屋の店さきで、三好の住所が分つた。その時はもう夜になつてゐた。

奥路地の中をはいつて行つた。あんまやがあり、駄菓子屋があり、ひつこし手傳屋があり、多人數の家族がやかましく食事をしてゐる家があつた。共同水道の前の二階家が三好のゐるはずの——社だ。その古い木札がマッチの先に現れた。すると、彼はグイと肩を摑まれた。振り向くと一人の背廣が、彼の顏にすれすれに顏を持つて來た。

「きみはどこへ行くのです」

「ここへ來たのです」

「何の用だ！」

「どうして、そんなことをきかねばならないんだ」

「いや、職務ですので——おききして、如何しようと云ふのではありませんが」

「名刺はありますか」

「これです」

「ぼくは三好と云ふ友人をここへ訪ねて來たのです」

「三好さん？　三好さんて方はおいでにならないでせう」

「そんなはずはない」

平治は格子戸をあけた。すると二階から大急ぎで男が下りて來た。破れ障子を開くと、それは小さい、もう可成年とつた人だつた。彼も亦、五六ケ月前から三好はゐないことを告げた。

「どうしたのです——どこにゐるか分りませんか」

男は暫く平治を觀察してゐた。平治は遠くから、わざわざ彼を訪ねて來たのだと云つた。

「ぢや、とにかく上んなさい」

疲れた平治は二階へ通つた。あがりきつたところに「死を恐れざる者に恐怖せよ！」といふ貼紙がしてあつた。彼はそれに頭をぶつつけさうになつた。クロポトキンの像や、虐殺された彼らの首領の寫眞があつた。粗末な机と椅子。

「三好君は元氣のいい人でしたが、女ができてからすつかり影をひそめて了ひました。戀愛の方が革命よりも力強いのかも知れませんな」

そして男は柔和に眼を細めて笑つた。平治は無感覺にそれをきいてゐた。疲れてゐる。

「大へんあつかましいのですが、今夜ここへとめてくれませんか。宿屋へ行けさうもないので」

男は再び彼を觀察して考へてゐた。

「いいでせう。雜魚寢しかできませんよ」

脂で冷く、じめじめした固い蒲團に身を横へた。そしてやがて眠つた。眠つて幾時間か經つて、太い男の聲や、ガヤガヤした足音を彼はきいた。「誰だ、誰だ」と云ふ聲もする。そして彼の蒲團の中にも大きい男がはいつて來た。だが平治は身動きもしないで眼をつぶつてゐた。

朝は早く起きた。戸を閉めないので、汚い部屋の中は白つぽい光が溢れてゐた。彼は頭を動かして男たちを眺めだした。男たちは、蒲團を頭からかぶつてゐたり、齒を軋ませたり、「よし」とか「何を！」とか寢言を云つてゐた。一つの寢床だけが蟬の脱殼のやうに空になつてゐて、枕もとには泥だらけの脚絆が置いてあつた。——平治の横に這入つて來た肥つた男は口を薄くあけて、脂で赤い顏をしてゐた。そして平治が立ちあがると、寒さうに蒲團は全部自分の身體に捲きこんで了つた。

肥つた森田が歩いて、小さい平治はそのあとについて行つた。廻轉扉が廻轉する。制帽をきたビルディングの守衛がジロリと二人の風采を見た。肥えた森田は立ちどまつて、彼のつれを待つた。エレヴェエターが下りて來た。それに乘るのだ。「三階」三階では森田はしばらくキヨロキヨロしてゐた。だがすぐに目的の會社のガラス戸の金文字が眼にはいつた。

「ここだ！」

平治は「搖」の實地見學に來た。敎はつた通りにやるのだ。

「庶務課長さんはおいでですか」

給仕は案内した。

森田は深々とした椅子に腰を下し、緣の革を撫でまはした。平治は暫く額になつたキリストを見てゐた。首の太い人物が輕く現はれた。いそがし氣に「さあ」と椅子をすすめた。平治は白々しく切りだした。バットの箱にでたらめの名を書いたのを名刺としてさしだした。

「實は——社のかういふ者です。以後、御ヂツコンにお願ひします。——今は浪人してゐるので何分の御扶助を願ひたいのです」

いちど課長の姿は消え、狀袋を手にして再び這入つて來た。狀袋は平治に手渡された。すると突然、森田は横からそれを奪つて、バリバリと封を切つた。そして、中をあらためると、彼は立ちあがつた。

彼らはそれで酒を飲んだ。平治は酒に弱かつた。晝間から飲んだので、彼は醜く眞赤になつて凋れた。

「森田さん、ぼくは飯を食ふ」

「杉君、きみはなかなか度胸がある」

そして、彼は日をきめて「出す」會社や、五十圓包みをくれる喜劇俳優や、どんなのが行つても、「必ず大丈夫」な火葬場の事務所のはなしをしだした。そして、女給に酒を命じた。平治はまづい食物を半分でよして、肘でその皿を押しやつた。そして、三十五、六すぎの森田の顏を見てゐた。その子供じみた顏を見てゐると次第に憂鬱になつた。

「なあに、奴らの金をいくら搖つてもいいのだ。奴らア我々の兄弟の血と油とを絞つてるのだ！　可哀さうな兄弟の代りに搖つたつて何の不思議がある！」

そして、その「兄弟たち」はどこにゐるのだ。ここではレコードは廻轉し、薄化粧した學生の一團とスカートの短い桃色の圓い顏をした少女とが笑つてゐた。

「出ませう！」

「まあ、ゆつくりし給へ。もう一杯」

出た時はすつかり夜になつてゐた。電燈がキラキラと美しい。夜はこの通りに人々を押し出した。彼らは別に用はなかつた。だが、男と女とは腕を組んで濶歩し、獨身ものは振りかへり振りかへり歩いた。店毎に置かれてあるラヂオの擴聲器が一齊に「世界の中心としての日本」と云ふ演說をはじめた。森田はそれを一軒一軒「フム、フム」と云つて聽いて廻つた。そして四つ角に來ると、立ちど

まつて「待てよ！」と云つて財布を調べた。
「これは足りない！　行けないぞ！　せつかくきみを案内しようと計畫してゐたのに――」
平治はその意味を察した。
「ぢや、ぼくは一足先へ歸りませう。あなただけ行つていらつしやい」
森田は圓タクの中からステッキをあげて「やあ失敬！」とどなつた。それから車は走つて行つて了つた。平治は――社の方へ歸つて來た。
そこは學生町の通りに繋つてゐた。明るい街や通りや人どみは何故誘惑するのか。無意識のうちに平治は大學寄りの寂しい通りから電車線路を越えて、露店の賑かに列んだ方へ來てゐた。――そしてその中で彼は立ちどまつて了つた。セツ子がゐるのだ。セツ子が露店で電燈の下で安物の玩具を列べて坐つてゐる。セルロイドの滑稽な人形、赤く塗られた鐵の汽車。少女は平治を烈しく睥んだ。その瞬間セツ子の姿は彼女から消えた。彼女はセツ子よりは少し身體が大きかつた。殊に上向いた時の四角い廣い肩が眼立つて大きかつた。粗末な陰氣なキモノをきてゐた。眼の下もセツ子よりは黝んでゐた。――だが、こんな酷似は滅多にあるものではない。平治は暫くの間、動搖してゐた。
路地の奥の――社の向ひ側に駄菓子屋があつた。露店の玩具賣りはそこの娘であることが發見された。ひるすぎ、平治が――社から出ると、再びセツ子の模型に逢つたのだ。彼女は今起きたばかりの表情をして、表を眺めながら、茶碗を手にしてゐた。そして、ゆつくりと飯を口に運んだ。晴れた日だつたので、平治はつい微笑して了つた。すると少女は茶碗を置いて烈しく彼を睥んだ。その睥みは彼をよろめかした。彼は街へ出た。

街はすでに夏の光に滿ちてゐた。號外がやかましく出て金融恐慌の後始末のため、政府は國民の九億圓を財閥にくれてやつたことを報じた。共產主義者は血みどろになつて戰つてゐた。彼らはブルジョア議會の解散を要求した。そして示威運動を行はうとして示威運動は蹴ちらされた。小さい工場は腐つた塀のやうにバタリバタリと倒れた。大きい工場では生產を合理化するために、何千人もの勞働者を嚴重な思想檢査のうちに、馘首した。――勞働者たちは飢ゑの前に立たされ、不安になつて來た。各所に工場代表會議が開かれた。だが、何故――社の仲間は動かないのだらう。彼らは勞働者の自發的な運動も共產主義者の煽動としてとりあげなかつた。眞實に勞働してゐる無政府主義者はさうでもなかつた。だが、ここに集つてゐる無政府主義者たちは今はすつかり大衆から離れて了つてゐた。そしてロだけで「政治はダラクだ」と云つて、非實踐的なのを、非鬪爭的なのをゴマカしてゐた。

玩具賣りの少女は何故笑はないのか。森田はこれを說明することができた。
少女の兄は小倉服を着て驛夫をしてゐた。專制的な政治權力を自分の階級のために、恣にしてゐた首相が、彼の勢力を誇りながら、東京驛から出發しようとしてゐた。かかる場合もその勢力を誇るのである。そして少女の兄はこの權力に得意滿面の男を殺さうとした。傲慢な彼は一言もなく、色を失つた大臣たちの腕の上に倒れた。霜夜であつた。少女の兄は、監獄に繋がれた。そして、一家は笑ひを失つた。
「我々の眼の先に少年テロリストがゐたのだ。彼は我々の知らぬ間に行動した」
森田はその頃からこの社にゐた。その頃は活氣のある愉快な時代であつた。殺されたり、死刑になつたり、無期になつてゐる諸先輩はまだここにゐた。森田も亦、危い仕事をして來た。だが今日は？

だが、生活はここではだらだらと流れた。遠いアメリカで魚屋と靴屋が無政府主義者である理由から絞殺された。これは――社に衝動を起した。これに抗議するためにパンフレットを發行した。それから淺草で仲間の全國的な大會があつた。――社からも代表に勞働者あがりの秋山が出た。これらの事件がやつと平穩な流れに抗した石であつた。流れはその石に打つかつて、一時白く泡立ち激した。だが勿論、それは――社の力ではなかつた。現實に戰つてゐる勞働者の壓力がここまでやつて來たのだ。

平治は次第に彼を激動させるものを要求しだした。冬近く、彼は仲間の者と、最も精鋭な共產主義者の多く活動してゐる大衆的日常政治行動團體の第二次全國大會に出かけて行つた。それをぶちこはすためだ。彼ら共產主義者たちは勞働民衆を踏臺にして新しい獨裁を、しかも今と同じに支配するものを將來しようとしてゐる、と云ふ意見から。

彼らは出かけた。傍聽席にかたまつて陣をとらうとした。だが、滿員のために離れ離れになつて了つた。赤い腕章を捲いた青年勞働者が整理した。

開會の直前に窓の下に喊聲が起つた。それは紋附羽織を着て白鉢卷をした一隊が、菊水の旗を押し立てて、圓タクで襲擊して來たのだ。やはりこの集會をぶちこはすために。

だが、彼らは頑丈な赤色自衞隊のために簡單に追拂はれて了つた。その次には會場は、あごひもをかけた警官隊に埋められた。演壇の下に金筋もでしやばつて來た。彼らもやはりこの集會をぶちこはさうとしてゐるのだ。

だが、會衆の一人は單純に一人とは計算できなかつた。一人は何十人何百人の勞働者を代表し、その代表が全國から集つて來てゐるのだつた。これらの力は自然と會場に滿ちてゐた。かう云ふ會合は眼に立たぬやうにぶちこはされねばならなかつた。官憲はこのことを十分知つてゐた。

「我等の大會を守れ、大膽に、細心に、嚴肅に」

會議は白熱して來た。人々の吐くエネルギイが重々しく、爆發する程、會場に滿ちた。身動きもならなかつた。平治は傍聽席に挾まつたまま、會議に吸ひとられてゐた。そこでは日常的な細微な鬪爭についてまで議せられた。この團體にゐる共產主義者のすぐれた手腕が眼立つた。その主義主張、その實際の鬪爭を通じて、黨員はもとより、勞働者の信頼を受けてゐる。全國的に、日々、しつこくなされてゐる現在の支配階級への戰爭、勞働攻勢、力と力の、最後には血と血との戰ひを、平治は二階の傍聽席から縮圖的に見下すことができた。

「これは明かに戰つてゐる」

晝飯の休憩が大へんおくれて來た。だが、身動きもできなかつた。彼の横の女工たちは小さい辨當包みを開き、男たちは大きな握飯を食ひはじめた。

「一つどうです」

青海苔で卷いた拳程の握飯を掴んでさし出した。平治はそれを受取つて食つた。中からは眞赤な梅干が出て來た。背後の學生は林檎を一つだけ食つて、平氣な顏をして議事について、刷物を讀んでゐた。

夜にはいつてもまだ會議はつづいた。明日もあるだらう。失敗した平治の仲間たちは何事もなかつたやうな顏で歸つて行つた。

「杉君、東京の方の代議員で大原つて男がゐたのに氣がついたか」

森田は云ひだした。それは四角な頤を持ち大きな吼える口を持ち、最も戰鬪的に今日の會議で働いた男であつた。その男の印象は誰にも殘つてゐた。森田はつづけて云つた。

「あいつは、もと我々の仲間にゐたんだが、ボルにダラクして了ひやがつた。反抗心が徹底してゐて、面白い男だつたが――」

彼がボル（共產主義者）に移つた時、以前の仲間は彼を襲つた。

「裏切者！」二週間もの間、彼は頭には繃帶をし、腕はつるして歩いた。だが、彼は「ボル」の團體でよく働いた。彼は以前の仲間には裏切つた。だが、彼の階級には裏切られなかつたのではないか。

――森田の言葉にはどことなく、そんな意味がふくまれてゐた。

「俺も、もう一度、あいつらの中で働くかな」

北海道から來てゐた勞働者上りの秋山が云つた。「すると、きみたちは俺を足腰の立たぬ程やつつけるか」

誰も答へなかつた。肥えた森田だけが、昔の活潑であつた「無政府主義者」の思ひ出と共に、かなしい感慨をした。

秋山は以前は「ボル系」であつた。彼は雪の北海道で「政治はダラク」であることを、身を以て經驗して來た。だが、彼は政治行動と云ふ意味を議會行動とまちがへてゐたのだ。彼はそこで三週間、不眠で働いた。それは同地方の政治的な先驅者を道會議員に立てるためであつた。中央から共產主義者が煽動のために潛んでやつて來た。植民地の荒くれ男たちは、「ストライキ」と云ふものに、血を燃した。各所にそれが勃發した。そして、その勢で彼らの候補者は當選した。

當選した翌日にはもうブルジョア政黨から「懇談」に來たり、その政黨の正二位の首領から親展書が來たりした。買收だ。――地位と金と女とが當選者の前にぶらぶら動いた。彼はその動く餌に知らず知らず首を動かした。

秋山は應接室の敷物の上に、疲れの爲にころがつて、下から新議員の顏を見てゐた。新議員は椅子の上で腕を組んでゐた。彼らは數時間、そんな風に睨みあつてゐた。遂に秋山は叫んだ。

「黨支部大會を臨時に開かう！」

そこで、議員の全部の行動は支部統制委員會の下に置かるべきであることを、嚴格に決定しようと、秋山は考へた。だが金錢の力は大きい。新議員は策動した。そしてその臨時大會には突如として「一定の政治的意見の拒否」案が上程された。意味するところは共產主義者排擊――秋山の一派排擊であつた。秋山は戰つた。だが勞働者の團結の力のまだ十分にない時代であつた。殊に北海道だ。秋山は負けた。すると同時に彼の情婦が繼母のために昇汞水をのまされて死んだ。彼はよろよろした。

その時、東京から無政府主義者の一團が宣傳に乘込んで來た。彼らは景氣のいい演說會を開いた。植民地の官憲の暴壓は極端であつた。彼らは口を開くや否や「中止！」を命じられた。「中止！」はダラダラした演說よりは大抵の場合、ずつと煽動的なものだ。疲れた秋山の頭には、彼らが云はうとして云へなかつた言葉が火花を散らした。無政府主義者は東京へ引きあげた。秋山があれ程身命をすり減らして、政治的に戰はすために立てた議員の行動はどうであつたか。――彼は蒼白い顏をして內地へ戻つた。そして――社にまで流れて來た。

今日、北海道で彼が「教育」した連中の多くに出くはした。彼らはみな立派な、大衆と共に戰ふ鬪士となつてゐた。その彼らの會議を潰すために彼は出かけたのだ。

「秋山さんぢやありませんか」

かう呼びかけられて、彼は容易に彼らの顏を見ることができなかつた。

3　組織的な組織

秋山は――社を去つた。平治はまだ殘つてゐた。彼は少年時代ひそかに師事してゐた詩人の所にも「搖」に出掛けた。その詩人はケチン坊で有名だつた。彼はその詩人が出さないので、相手の顏面に一擊を浴せた。へたばつた詩人は鼻血を出した。彼は「あつ！　血だ、血だ！」と大仰に叫んで平治につつかかつて來た。平治はもう面倒臭くなつてしまつた。詩人の細君が巡査をひつぱつて來た。平治は逃走した。そして歸つて來た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com